

## 12. 亜急性毒性試験

### (1) 90日間亜急性毒性試験（ラット）

SDラット（一群雌雄各15匹）を用いた混餌（原体：0、100、500及び2,000 ppm、雌のみ8,000 ppm）投与による90日間亜急性毒性試験が実施された。雄2,000 ppm投与群及び雌8,000 ppm投与群では4週間の回復期間を設けた。

各投与群に認められた毒性所見は表10に示されている。雌雄の2,000 ppm投与群各1例、対照群でも雌雄1例ずつに死亡あるいは切迫と殺動物が認められた。死亡及び切迫と殺した個体では、瀕死状態でうずくまり及び自発運動低下が観察された。

毒性所見として観察された症状の多くは回復期間中に回復したが、回復期間終了時に2,000 ppm投与群雄で脾萎縮が、8,000 ppm投与群雌（1例）で子宮及び胸腺の萎縮が認められた。

本試験において、500 ppm以上投与群雄及び2,000 ppm以上投与群雌に体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雄で100 ppm（6.44 mg/kg 体重/日）、雌で500 ppm（32.8 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照2、8）

表10 90日間亜急性毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
8,000 ppm		<ul style="list-style-type: none"> <li>・死亡（1例）、切迫と殺（4例）</li> <li>・軟便、立毛、削瘦</li> <li>・飲水量減少</li> <li>・RBC、Ht、Hb増加、好酸球数、好酸球比減少</li> <li>・Glu、Ure、カリウム増加</li> <li>・尿pH低下</li> <li>・小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・腎急性尿細管病変（死亡及び切迫と殺動物のみ）</li> </ul>
2,000 ppm以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・切迫と殺（1例）</li> <li>・削瘦</li> <li>・飲水量減少</li> <li>・TP、Glob減少、A/G比、T.Chol増加</li> <li>・小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・脾萎縮</li> <li>・骨髓出血・細胞低形成（切迫と殺動物のみ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・死亡（2,000ppm投与群1例）</li> <li>・体重増加抑制、摂餌量減少</li> <li>・TP、Glob減少、A/G比増加</li> <li>・肝比重量増加</li> <li>・脾萎縮</li> <li>・骨髓出血、細胞低形成、萎縮（脾・唾液腺・脾・腸粘膜・胸腺・生殖器・下垂体：死亡及び切迫と殺動物のみ）</li> </ul>
500 ppm以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制、摂餌量減少</li> <li>・肝及び腎比重量増加<sup>1</sup></li> </ul>	500ppm以下毒性所見なし
100 ppm	毒性所見なし	

<sup>1</sup> 体重比重量を比重量という（以下同じ）。

## (2) 90日間亜急性毒性試験 (イヌ)

ビーグル犬 (一群雌雄各 4 匹) を用いたカプセル経口 (原体: 0、5、30、150 及び 500 mg/kg 体重/日) 投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群に認められた毒性所見は表 11 に示されている。

500 mg/kg 体重/日投与群雄 1 例が摂餌量の低下、体重減少及び自発運動低下が見られたため切迫と殺された。それ以外に死亡例はなかった。この個体では病理組織学的検査で肝細胞空胞化、小腸粘膜びらん等の所見が認められた。

500 mg/kg 体重/日投与群雌雄では摂餌量減少が著しく、給餌時間を延長した。また同群雄では更に強制給餌及び検体投与の一時的中止 (3 例) を行った。

本試験において、30 mg/kg 体重/日以上投与群雄で TG 増加が、150 mg/kg 体重/日以上投与群雌で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雄で 5 mg/kg 体重/日、雌で 30 mg/kg 体重/日であると考えられた。(参照 2)

表 11 90日間亜急性毒性試験 (イヌ) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
500 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・切迫と殺 (1 例)</li> <li>・摂餌量減少</li> <li>・消瘦</li> <li>・RBC、Hb、Ht 減少、PLT 増加</li> <li>・WBC、Neu、Mon 増加、好酸球数、好酸球比減少</li> <li>・TP、Alb、Glob、T.Chol、リン脂質、カルシウム、カリウム減少</li> <li>・腎及び副腎比重量増加、胸腺及び精巣絶対及び比重量減少</li> <li>・胆嚢上皮過形成</li> <li>・精細管萎縮</li> <li>・前立腺萎縮</li> <li>・骨格筋、胸腺、リンパ節の萎縮等の萎縮性変化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂餌量減少</li> <li>・消瘦</li> <li>・TP、Alb、Glob、カルシウム減少</li> <li>・副腎比重量増加</li> <li>・肝細胞肥大</li> <li>・胆嚢上皮過形成</li> <li>・骨格筋、胸腺、リンパ節の萎縮等の萎縮性変化</li> </ul>
150 mg/kg 体重/日以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嘔吐、下痢</li> <li>・体重増加抑制</li> <li>・Cre、CK 減少</li> <li>・肝及び甲状腺絶対及び比重量増加</li> <li>・肝細胞肥大</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嘔吐、下痢</li> <li>・体重増加抑制</li> <li>・Cre、T.Chol、リン脂質、カリウム、CK 減少、TG 増加</li> <li>・肝比重量増加</li> </ul>
30 mg/kg 体重/日以上	・TG 増加	30 mg/kg 体重/日以下 毒性所見なし
5 mg/kg 体重/日	毒性所見なし	

### (3) 28日間亜急性経皮毒性試験（ラット）

SDラット（一群雌雄各5匹）を用いた経皮（原体：0、10、100及び1,000 mg/kg 体重/日、6時間/日、5日/週）投与による28日間亜急性経皮毒性試験が実施された。

1,000 mg/kg 体重/日投与群雄で肝及び腎絶対及び比重量が増加した他は、検体投与による影響は認められなかった。

本試験における無毒性量は、雄で100 mg/kg 体重/日、雌で1,000 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照2、8）

## 13. 慢性毒性試験及び発がん性試験

### (1) 1年間慢性毒性試験（イヌ）

ビーグル犬（一群雌雄各4匹）を用いたカプセル経口（原体：0、2、5、50及び200 mg/kg 体重/日）投与による1年間慢性毒性試験が実施された。

各投与群に認められた毒性所見は表12に示されている。

死亡例は認められなかった。50 mg/kg 体重/日以上投与群雄で精巣絶対及び比重量増加が認められたが、対照群が背景データの下限であったこと及び病理組織学的な所見が認められなかったことから、投与による影響とは考えられなかった。

本試験において、50 mg/kg 体重/日投与群雌雄で肝絶対及び比重量増加等が認められたので、無毒性量は雌雄とも5 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照2、3、5、6、8）

表12 1年間慢性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
200 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"><li>・嘔吐</li><li>・摂餌量減少</li><li>・TG、Glob、クロール増加、TP減少</li><li>・肝細胞肥大</li><li>・骨髓低形成</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・下痢、嘔吐</li><li>・TG、ALP増加</li><li>・骨髓低形成</li></ul>
50 mg/kg 体重/日以上	<ul style="list-style-type: none"><li>・下痢</li><li>・Alb減少、ALP増加</li><li>・肝絶対及び比重量増加</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・体重増加抑制、摂餌量減少</li><li>・プロトロンビン活性上昇</li><li>・肝絶対及び比重量増加</li><li>・肝細胞肥大</li></ul>
5 mg/kg 体重/日以下	毒性所見なし	毒性所見なし

### (2) 2年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）

SDラット（一群雌雄各80匹）を用いた混餌（原体：0、50、250、750及び1,500 ppm）投与による2年間慢性毒性/発がん性併合試験が実施された。

各投与群に認められた毒性所見は表13に示されている。

1,500 ppm投与群雌及び750 ppm以上投与群雄で死亡率の低下が認められた。検体投与に関連して発生頻度が増加した腫瘍性病変はなかった。1500 ppm投

与群雄で腸間膜リンパ節の血管腫及び副腎良性髄質腫瘍の有意な増加が観察されたが、血管腫については背景データの範囲内であり、副腎腫瘍については生存率が高かったために腫瘍発生頻度も増加したと考えられ、いずれも投与による影響とは考えられなかった。

本試験において、750 ppm 以上投与群雌雄で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 250 ppm (雄：9.81 mg/kg 体重/日、雌：11.4 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発がん性は認められなかった。(参照 2、6、8)

表 13 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験 (ラット) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
1,500 ppm	・下痢 ・摂餌量減少、飲水量増加	・摂餌量、飲水量減少 ・肝及び腎比重量増加
750 ppm 以上	・体重増加抑制 ・肝比重量増加	・体重増加抑制
250 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

### (3) 18 ヶ月間発がん性試験 (マウス)

ICR マウス (一群雌雄各 70 匹) を用いた混餌 (0、30、300、1,000 及び 2,000 ppm) 投与による 18 ヶ月間発がん性試験が実施された。

各投与群に認められた毒性所見は表 14 に示されている。対照群と投与群で死亡率に差は認められなかった。

検体投与に関連して発生頻度が増加した腫瘍性病変はなかった。

本試験において、1,000 ppm 以上投与群雌雄で肝絶対及び比重量増加等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 300 ppm (雄：39.4 mg/kg 体重/日、雌：35.7 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発がん性は認められなかった。

(参照 2、3、6)

表 14 18 ヶ月間発がん性試験 (マウス) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
2,000 ppm	・体重増加抑制 ・肝細胞肥大、脂肪化	・摂餌量減少 ・脾比重量増加 ・肝細胞肥大、肝単細胞壊死
1,000 ppm 以上	・肝絶対及び比重量増加 ・肝単細胞壊死	・体重増加抑制 ・肝絶対及び比重量増加 ・肝限局性壊死
300ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

## 14. 生殖発生毒性試験

### (1) 2 世代繁殖試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 30 匹) を用いた混餌 (原体：0、50、750 及び 1,500 ppm)

投与による2世代繁殖試験が実施された。P世代では2回交配、出産させ（児動物F<sub>1a</sub>及びF<sub>1b</sub>）、F<sub>1a</sub>をF<sub>1</sub>世代の親動物とした。F<sub>1a</sub>の交配、出産は1回とした（児動物F<sub>2</sub>）。

親動物及び児動物における各投与群で認められた毒性所見はそれぞれ表15に示されている。

親動物（P及びF<sub>1a</sub>）では、750 ppm以上投与群雌雄で肝、腎、精巣、脳、卵巣、胸腺の比重量増加が散見されたが、これらは体重増加抑制の結果最終体重が低下したことに起因するものであった。

本試験において、親動物及び児動物で750 ppm以上投与群雌雄に体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は親動物及び児動物の雌雄とも50 ppm（P雄：3.1 mg/kg 体重/日、P雌：5.1 mg/kg 体重/日、F<sub>1a</sub>雄：3.8 mg/kg 体重/日、F<sub>1b</sub>雌：5.3 mg/kg 体重/日）であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められなかった。（参照2,3,5,6,8）

表15 2世代繁殖試験（ラット）で認められた毒性所見

	投与群	親P、児：F <sub>1a</sub> ,F <sub>1b</sub>		親：F <sub>1a</sub> 、児：F <sub>2</sub>	
		雄	雌	雄	雌
親動物	1,500 ppm	・体重増加抑制、 摂餌量減少 ・脾絶対重量減少 ・小葉中心性肝細胞肥大	・小葉中心性肝細胞肥大 ・副腎絶対重量減少 ・腎尿細管色素沈着	・摂餌量減少 ・脾絶対重量減少	
	750 ppm 以上	・腎尿細管色素沈着	・体重増加抑制、 摂餌量減少 ・脳絶対重量減少	・体重増加抑制 ・脳絶対重量減少 ・小葉中心性肝細胞肥大	・体重増加抑制、 摂餌量減少 ・腎絶対重量減少 ・肝絶対重量減少（750ppmのみ） ・小葉中心性肝細胞肥大
	50 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし
児動物	1,500 ppm	・眼瞼開裂遅延	・眼瞼開裂遅延	・眼瞼開裂遅延	・眼瞼開裂遅延
	750 ppm 以上	・体重増加抑制	・体重増加抑制	・体重増加抑制	・体重増加抑制
	50 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし

## (2) 発生毒性試験（ラット）

SDラット（一群雌24匹）の妊娠6～15日に強制経口（原体：0,10,100及び1,000 mg/kg 体重/日、溶媒：0.5%CMCナトリウム水溶液）投与し、発生毒性試験が実施された。

母動物では、100 mg/kg 体重/日以上投与群で体重増加抑制及び摂餌量減少が認められた。

胎児では、1,000 mg/kg 体重/日投与群で胸腺肥大が認められたが、毒性所見であるとは考えられなかった。

本試験における無毒性量は、母動物で 10 mg/kg 体重/日、胎児で 1,000 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。(参照 2,3,5,6,8)

### (3) 発生毒性試験 (ウサギ)

Russian ウサギ (一群雌 19 匹) の妊娠 7~19 日に強制経口 (原体 : 0, 10, 50, 250 及び 500 mg/kg 体重/日、溶媒 : 0.5 % CMC 水溶液) 投与し、発生毒性試験が実施された。

母動物では、250 mg/kg 体重/日以上投与群で体重増加抑制及び摂餌量減少が認められた。

胎児では、500 mg/kg 体重/日投与群で骨格発育に軽度の影響 (第 3 及び第 4 胸骨癒合) が認められた。

本試験における無毒性量は、母動物で 50 mg/kg 体重/日、胎児で 250 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。(参照 2,3,5,8)

## 15. 遺伝毒性試験

トリフロキシストロビンの細菌を用いた復帰突然変異試験、チャイニーズハムスター V79 細胞を用いた遺伝子突然変異試験、チャイニーズハムスター卵巣由来培養細胞 (CHO) を用いた染色体異常試験、ラット肝初代培養細胞を用いた不定期 DNA 合成 (UDS) 試験及びマウスの骨髄細胞を用いた小核試験が実施された。

結果は表 16 に示されており、チャイニーズハムスター V79 細胞を用いた遺伝子突然変異試験で一部陽性であったが、*in vivo* の小核試験を含むその他の試験が全て陰性であったことから、生体において問題となる遺伝毒性はないものと考えられた。(参照 2,3,5,6,8)

表 16 遺伝毒性試験概要 (原体)

試験	対象	処理濃度・投与量	結果
<i>in vitro</i>	復帰突然変異試験 <i>Salmonella typhimurium</i> (TA98, TA100, TA102, TA1535, TA1537 株) <i>Escherichia coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	① 313~5,000 µg/プレート (+/-S9) ② 61.7~5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性
	遺伝子突然変異試験 チャイニーズハムスター V79 細胞	① 30.9~834 µg/mL (+S9) 1.14~834 µg/mL (-S9) ② 11.1~300 µg/mL (+S9) 0.14~100 µg/mL (-S9) ③ 100~250 µg/mL (+S9) 50~150 µg/mL (-S9)	陽性 <sup>1)</sup>

	染色体異常試験	チャイニーズハムスター卵巣由来細胞(CHO)	①12.5~50 µg/mL (+S9) (処理 3 時間後に細胞採取) 0.781~3.13 µg/mL (-S9) (処理 18 時間後に細胞採取) ②25~100 µg/mL (+S9) 12.5~50 µg/mL (+S9) (処理 3 時間後に細胞採取) 0.049~0.195µg/mL(-S9) (処理 18 時間及び 42 時間後に細胞採取)	陰性
	UDS 試験	ラット肝初代培養細胞	0.39~50 µg/mL	陰性
<i>in vivo</i>	小核試験	ICR マウス (骨髄細胞) (雌雄各 5 匹)	①単回経口投与 5,000 mg/kg 体重 (投与 16 及び 48 時間後と殺) ②単回経口投与 1,250、2,500、5,000 mg/kg 体重/日 (最終投与 24 時間後と殺)	陰性

注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

1)代謝活性化系存在下のみ陽性

代謝物 A1、B1 及び g の細菌を用いた復帰突然変異試験が実施された。

結果は表 17 に示されている。試験結果は全て陰性であり、遺伝毒性はないものと考えられた。(参照 2、3、5、8)

表 17 遺伝毒性試験概要 (代謝物)

代謝物	試験	対象	処理濃度・投与量	結果
代謝物 A1	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA102、 TA1535、TA1537 株)	313~5,000 µg/7 <sup>h</sup> レット (+/-S9)	陰性
代謝物 B1				陰性
代謝物 g		(使用菌株不明)		陰性

注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

### Ⅲ. 食品健康影響評価

参照に挙げた資料を用いて、農薬「トリフロキシストロビン」の食品健康影響評価を実施した。

動物体内運命試験の結果、トリフロキシストロビンは速やかに吸収、排泄された。主要排泄経路は胆汁を介した糞中であつた。体内では主に腎臓、肝臓及び血液に分布した。多くの代謝物が存在したが、主要代謝物として B 及び K が存在した。

植物体内運命試験の結果、葉に散布されたトリフロキシストロビンの可食部への移行は少ないと考えられた。主要代謝物はトリフロキシストロビンの異性体及び B であつた。

動物及び植物での主要代謝経路は、メチルエステル基の加水分解、メトキシイミノ基の O 脱メチル化及びメチル側鎖の酸化による一級アルコールの生成に続く酸化によるカルボン酸の生成と考えられた。

植物固有の代謝物として、代謝物 A3、B1、t、u、v 等が確認され、代謝物 B1 は毒性試験の結果、問題となる毒性は認められなかつた。その他の代謝物はごく微量であつた。

トリフロキシストロビン及び代謝物 B を分析対象化合物として作物残留試験が実施された。トリフロキシストロビンの最高値は、可食部においては最終散布 14 日後に収穫した茶（荒茶）の 2.32 mg/kg であつた。代謝物 B の最高値は最終散布 1 日後に収穫したキュウリ（果実）の 0.079 mg/kg であつた。

各種毒性試験結果から、トリフロキシストロビン投与による影響は、主に肝臓に認められた。発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性及び生体において問題となる遺伝毒性は認められなかつた。

各種試験結果から、農産物中の暴露評価対象物質をトリフロキシストロビン（親化合物のみ）と設定した。

各試験における無毒性量等は表 18 に示されている。

各試験で得られた無毒性量の最小値は、ラットを用いた 2 世代繁殖試験の 3.1 mg/kg 体重/日であつたが、ラットを用いた 90 日間亜急性毒性試験の無毒性量は 6.44 mg/kg 体重/日、より長期の試験である 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験の無毒性量は 9.81 mg/kg 体重/日であつた。この差は用量設定の違いによるもので、ラットにおける無毒性量は 9.81 mg/kg 体重/日と考えられ、一日摂取許容量（ADI）の根拠には、イヌを用いた 1 年間慢性毒性試験の 5 mg/kg 体重/日が妥当と考えられた。

食品安全委員会は、イヌを用いた 1 年間慢性毒性試験の無毒性量 5 mg/kg 体重/日を根拠として、安全係数 100 で除した 0.05 mg/kg 体重/日を ADI と設定した。

ADI	0.05 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	慢性毒性試験
(動物種)	イヌ
(期間)	1 年間



(投与方法)	カプセル経口
(無毒性量)	5 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

暴露量については、当評価結果を踏まえて暫定基準値の見直しを行う際に確認することとする。

表 18 各試験における無毒性量等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) <sup>1)</sup>			
			農薬抄録	JMPR	米国	豪州
ラット	90 日間亜急性 毒性試験	0、100、500、2,000、 8,000 <sup>2)</sup> ppm	雄：6.44 雌：32.8	31	雄：30.6 雌：32.8	雄：6.4 雌：32.8
		雄：0、6.44、30.6、 127 雌：0、6.76、32.8、 133、618	雌雄：体重増加抑制等	雌雄：体重増加抑制等	体重増加抑制等	雌雄：体重増加抑制等
	2 年間慢性毒性 /発がん性併合 試験	0、50、250、750、 1,500 ppm	雄：9.81 雌：11.4	30	雄：9.81 雌：11.4	雄：9.8 雌：11.4
		雄：0、1.95、9.81、 29.7、62.2 雌：0、2.22、11.4、 34.5、72.8	雌雄：体重増加抑制等 (発がん性は認めら れない)	雌雄：体重増加抑制等 (発がん性は認めら れない)	体重増加抑制 (発がん性は認めら れない)	体重増加抑制等 (発がん性は認めら れない)
2 世代繁殖試験	0、50、750、1,500 ppm	P 雄：3.1 P 雌：5.1 F <sub>1</sub> 雄：3.8 F <sub>1</sub> 雌：5.3	親動物及び児動物 P 雄：3.1 P 雌：5.1 F <sub>1</sub> 雄：3.8 F <sub>1</sub> 雌：5.3	親動物：3.8 児動物：3.8	親動物：3.8	親動物 雄：2.2~7.5 雌：3.0~10.4
		F <sub>1</sub> 雄：0、3.8、58.4、 127 F <sub>1</sub> 雌：0、5.3、81.5、 168	親動物及び児動物 ：体重増加抑制等 (繁殖能に対する影 響は認められない)	親動物及び児動物 ：体重増加抑制	親動物：体重増加抑制 等 (繁殖能に対する影 響は認められない)	親動物：体重増加抑制 等 (繁殖能に対する影 響は認められない)
発生毒性試験	0、10、100、1,000	母動物：10 胎児：1,000	母動物：10 胎児：1,000	母動物：10	母動物：10 胎児：100	
		母動物：体重増加抑 制、摂餌量減少 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認めら れない)	(催奇形性は認められ ない)	母動物：体重増加抑 制、摂餌量減少 (催奇形性は認めら れない)	母動物：体重増加抑 制、摂餌量減少 胎児：胸腺肥大 (催奇形性は認めら れない)	

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) 1)			
			農薬抄録	JMPR	米国	豪州
マウス	18 ヲ月間 発がん性試験	0、30、300、1,000、 2,000 ppm 雄：0、3.90、39.4、 131、274 雌：0、3.51、35.7、 124、246	雄：39.4 雌：35.7  雌雄：肝絶対及び比重 量増加等 (発がん性は認めら れない)	36  雌雄：肝重量増加 (発がん性は認めら れない)	39.4  肝への影響 (発がん性は認めら れない)	雄：39.4 雌：3.51  雄：肝単細胞壊死等 雌：体重増加抑制 (発がん性は認めら れない)
ウサギ	発生毒性試験	0、10、50、250、500	母動物：50 胎児：250  母動物：体重増加抑 制、摂餌量減少 胎児：第3及び第4胸 骨癒合 (催奇形性は認められ ない)	母動物：50 胎児：250	母動物：50 胎児：250  母動物：体重増加抑 制、摂餌量減少 胎児：骨格変異 (催奇形性は認められ ない)	母動物及び胎児： 1000  毒性所見なし (催奇形性は認められ ない)
イヌ	90 日間亜急性 毒性試験	0、5、30、150、500	雄：5 雌：30  雄：TG 増加 雌：体重増加抑制等	30  雌雄：体重増加抑制等	30  肝細胞肥大	雌雄：30  雌雄：体重増加抑制等
	1 年間慢性 毒性試験	0、2、5、50、200	雌雄：5  雌雄：肝絶対及び比重 量増加等	5  雌雄：嘔吐、下痢等	5  肝重量の増加、肝細胞 肥大	雌雄：5  雌雄：肝重量増加
ADI			NOAEL：5 SF：100 ADI：0.05	NOAEL：3.8 SF：100 ADI：0.04	NOAEL：3.8 UF：100 cRfD：0.038	NOAEL：5 UF：100 ADI：0.05
ADI 設定根拠資料			イヌ 1 年間慢性毒性 試験	ラット 2 世代繁殖毒 性試験	ラット 2 世代繁殖毒 性試験	イヌ 1 年間慢性毒性 試験

SF：安全係数 UF：不確実係数 cRfD：慢性参照用量

1)無毒性量欄には、最小毒性量で認められた主な毒性所見等を記した。

2)8,000ppm は雌のみで試験を実施

<別紙1：代謝物/分解物略称>

記号	略称	化学名
A1	CGA357261 (Z,E 異性体)	(Z,E)-メトキシイミノ-{2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-酢酸メチルエステル
A2	CGA331409 (E,Z 異性体)	(Z,E)-メトキシイミノ-{2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-酢酸メチルエステル
A3	CGA357262 (Z,Z 異性体)	(Z,Z)-メトキシイミノ-{2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-酢酸メチルエステル
B	CGA321113	(E,E)-メトキシイミノ-{2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-酢酸
B1	CGA373466	(Z,E)-メトキシイミノ-{2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-酢酸
B2	CGA373465	(E,Z)-メトキシイミノ-{2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-酢酸
K	NOA405637	ヒドロキシイミノ-{2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-酢酸メチルエステル
g	NOA414412	{2-[1-(3-ヒドロキシ-5-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-メトキシイミノ-酢酸
h	NOA417076	{2-[1-(4-ヒドロキシ-3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-フェニル}-メトキシイミノ-酢酸
m	CGA357276	2-[1-(3-トリフルオロメチル-フェニル)-エチリデンアミノオキシメチル]-ベンゾニトリル
o	CGA107170	3-トリフルオロメチル-アセトフェノン
p	CGA289565	2,3-ベンズオキサジン-4-カルボン酸メチル
q	—	2-ヒドロキシメチルベンゾニトリル
t	II9b	2-{1-[2-(カルボキシメトキシイミノメチル)フェニルメトキシイミノ]エチル}-4-トリフルオロメチルフェニル グルコシド
u	II19a	{2-[1-(2,3-ジヒドロキシ-5-トリフルオロメチルフェニル)-2-ヒドロキシエチリデンアミノオキシメチル]フェニル}メトキシイミノ酢酸
v	NOA413161/ NOA413163	2-{1-[2-(カルボキシメトキシイミノメチル)フェニルメトキシイミノ]エチル}-6-トリフルオロメチルフェニル グルコシド (異性体 3 種より構成)
w	II11	2-[2-(カルボキシメトキシイミノメチル)フェニルメトキシイミノ]-2-(3-トリフルオロメチルフェニル)エチルグルコシド

<別紙2：検査値等略称>

略称	名称
A/G 比	アルブミン/グロブリン比
ai	有効成分量
Alb	アルブミン
ALP	アルカリホスファターゼ
CK	クレアチンキナーゼ
C <sub>max</sub>	最高濃度
Cre	クレアチニン
CMC	カルボキシメチルセルロース
Glob	グロブリン
Glu	グルコース（血糖）
Hb	ヘモグロビン量（血色素量）
Ht	ヘマトクリット値
LC <sub>50</sub>	半数致死濃度
LD <sub>50</sub>	半数致死量
Mon	単球数
Neu	好中球数
PHI	最終使用から収穫までの日数
PLT	血小板数
RBC	赤血球数
T <sub>1/2</sub>	消失半減期
TAR	総投与（処理）放射能
T.Chol	総コレステロール
TG	トリグリセリド
T <sub>max</sub>	最高濃度到達時間
TP	総蛋白質
TRR	総残留放射能
Ure	尿素
WBC	白血球数

<別紙3：作物残留試験成績（国内）>

作物名 (分析部 位) 実施年	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					トリフロキシ ストロピン		代謝物B		トリフロキシ ストロピン		代謝物 B	
					最高 値	平均 値	最高 値	平均 値	最高 値	平均 値	最高 値	平均 値
きゅうり (果実) 1998年	1	250 ×3	3	1	0.23	0.23	0.05	0.05	0.279	0.268	0.079	0.078
				3	0.12	0.12	0.05	0.05	0.118	0.116	0.048	0.048
				7	0.06	0.06	0.04	0.04	0.041	0.041	0.031	0.030
	1	300 ×3	3	1	0.20	0.20	0.07	0.07	0.20	0.195	0.072	0.072
3	0.07	0.07	0.06	0.06	0.084	0.082	0.058	0.058				
7	0.02	0.02	0.03	0.03	0.016	0.016	0.024	0.022				
りんご (果実) 1998年	1	1,000 ×4	4	1	0.75	0.74	0.02	0.02	1.20	1.20	<0.005	<0.005
				7	0.57	0.56	<0.01	<0.01	1.09	1.08	<0.005	<0.005
				14	0.60	0.58	0.01	0.01	0.92	0.908	0.006	0.006
				21	0.40	0.40	<0.01	<0.01	0.599	0.567	0.005	0.005
	1	7	0.5	0.48	<0.01	<0.01	0.836	0.813	<0.005	<0.005		
	7	0.66	0.64	<0.01	<0.01	0.433	0.421	<0.005	<0.005			
	14	0.36	0.34	<0.01	<0.01	0.365	0.350	<0.005	<0.005			
	21	0.42	0.42	0.01	0.01	0.476	0.459	<0.005	<0.005			
日本なし (果実) 2005年	1	750 ×4	4	1	1.05	1.05			0.86	0.85		
				3	0.88	0.87			0.72	0.70		
				7	0.78	0.78			0.51	0.50		
				14	0.51	0.50			0.51	0.50		
西洋なし (果実) 2005年	1	500 ×4	4	1	1.96	1.94			1.46	1.44		
				3	1.47	1.45			1.40	1.37		
				7	1.27	1.24			1.13	1.08		
				14	0.98	0.98			1.08	1.04		
もも (果肉) 2004年	1	500 ×3	3	1	<0.02	<0.02			<0.02	<0.02		
				7	<0.02	<0.02			<0.02	<0.02		
				14	<0.02	<0.02			<0.02	<0.02		
				21	<0.02	<0.02			<0.02	<0.02		
	1	750 ×3	3	1	<0.02	<0.02			<0.02	<0.02		
	7	<0.02	<0.02			0.05	0.04					
	14	<0.02	<0.02			<0.02	<0.02					
	21	<0.02	<0.02			<0.02	<0.02					
もも (果皮) 2004年	1	500 ×3	3	1	9.46	9.10			5.03	5.00		
				7	5.60	5.42			4.46	4.45		
				14	7.63	7.36			4.33	4.32		
				21	5.51	5.28			3.68	3.62		
	1	750 ×3	3	1	10.6	10.4			7.50	7.50		
	7	9.98	9.65			6.47	6.35					
	14	6.68	6.53			4.51	4.46					
	21	7.76	7.46			4.17	4.14					
おうとう (果実) 2004年	1	625 ×3	3	14	0.82	0.81			0.61	0.58		
				21	0.86	0.86			0.83	0.82		
	1			14	0.99	0.96			0.44	0.42		
	21			0.60	0.59			0.48	0.48			
茶 (荒茶) 2001年	1	250 ×2	2	14	2.14	2.10			2.32	2.25		
				21	0.11	0.11			0.12	0.12		
	1			14	1.32	1.31			1.49	1.46		
	21			0.35	0.34			0.43	0.42			
茶 (荒茶) 2002年	1	250 ×2	2	14					0.79	0.78		
				21					0.37	0.36		

作物名 (分析部 位) 実施年	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					トリフロキシ ストロビン		代謝物B		トリフロキシ ストロビン		代謝物 B	
					最高 値	平均 値	最高 値	平均 値	最高 値	平均 値	最高 値	平均 値
茶 (浸出液) 2001年	1	250 ×2	2	14	/	/	/	/	0.08	0.08	/	/
				21	/	/	/	/	<0.02	<0.02	/	/
	14			/	/	/	/	0.04	0.04	/	/	
	21			/	/	/	/	<0.02	<0.02	/	/	

注) 試験にはフロアブルを用いた

- ・一部に定量限界未満を含むデータの平均を計算する場合は定量限界値を検出したものとして計算し、\*を付した。
- ・全てのデータが定量限界未満の場合は定量限界値の平均に<を付して記載した。

<別紙4：作物残留試験成績（海外）>

作物名 (分析部位) 実施年	試験 圃場 数	剤型	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI	残留値 (mg/kg)			
						トリフロキシ ストロビン		代謝物 B	
						最高値	平均値	最高値	平均値
ライ麦 (穀粒) 1995-1999年	3	EC	188-250	2	34-35 41-47	0.05 0.05	0.03* 0.03*	<0.02 <0.02	<0.02 <0.02
ライ麦 (麦わら) 1995-1999年	3	EC	188-250	2	34-35 41-47	0.43 0.36	0.27 0.17*	0.12 0.09	0.08 0.07*
ライ麦 (穀粒) 2003年	1	SC	100	2	56	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
ライ麦 (麦わら) 2003年	1	SC	100	2	56	0.12	0.12	0.02	0.02
えんばく (穀粒) 1999年	12	EC	62.5	2	38-42 49-56 83	<0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02
えんばく (麦わら) 1999年	12	EC	62.5	2	38-42 49-56 83	0.12 0.07 <0.02	0.06* 0.04* <0.02	<0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02
大豆 (子実) 2003年	20	EC	87-95×3	3	19-24	0.058 <sup>1)</sup>	0.015* <sup>1)</sup>	/	/
はくさい (葉球) 2002年	1	SC	0.025/株 0.05/株	1	21	0.17 0.23	0.16 0.20	<0.04 0.10	<0.04 0.01
にんにく (鱗茎) 2004年	3	SC	75×5 150×5	5	14	<0.05 <0.05	<0.05 <0.05	/	/
アスパラガス (若茎) 2002年	7	WG	138-150×3	3	92-100 167-180	<0.05 <0.05	<0.05 <0.05	<0.02 <0.02	<0.02 <0.02
にんじん (根) 1999-2000年	10	WG	140×4	4	6-7	0.068	0.026*	0.022	0.02*
セラー (莖葉) 1999-2000年	1 8	WG	140×6 140×4	6 4	7 6-8	0.22 1.8	0.20 0.61	0.035 0.036	0.034 0.023*
ミニトマト (果実) 2002年	1	SC	- 2)	3	1 3 5 7	1.48 1.20 0.80 0.56	1.35 1.11 0.73 0.49	<0.03 <0.03 <0.03 <0.03	<0.03 <0.03 <0.03 <0.03
トマト (果実) 1997-1998年	2 2 12 2	WG	140×8	8	0 1 3 5	0.25 0.36 0.49 0.16	0.16 0.17* 0.10* 0.08*	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02
トマト (果実) 2001年	3	WG	140×4	4	0 3 5 7 10 12-13 15-16	0.315 0.344 0.208 0.230 0.191 0.184 0.902	0.144 0.120 0.099 0.104 0.084 0.078 0.184	<0.002 0.002 <0.002 <0.002 <0.002 <0.002 <0.002	<0.002 0.002* <0.002 <0.002 <0.002 <0.002 <0.002



作物名 (分析部位) 実施年	試験圃 場数	剤型	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI	残留値 (mg/kg)			
						トリフロキシ ストロビン		代謝物 B	
						最高値	平均値	最高値	平均値
			140×8	8	0 3 5 7 10 12-13 15-16	0.581 0.426 0.320 0.353 0.157 0.218 0.233	0.284 0.165 0.124 0.149 0.081 0.098 0.097	0.007 0.003 <0.002 <0.002 <0.002 <0.002 <0.002	0.002 0.002 <0.002 <0.002 <0.002 <0.002 <0.002
ピーマン (果実) 1997年	1 6 1 1	WG	140×8	8	0 1 3 5	0.12 0.08 0.14 <0.02	0.12 0.07 0.08 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02
とうがらし (果実) 1997年	3	WG	140×8	8	3	0.27	0.12	<0.02	<0.02
とうがらし (果実) 2001年	3	WG	140×4  140×8	4  8	0 3 5 7 10 13 16  0 3 5 7 10 13 16	0.156 0.138 0.155 0.156 0.090 0.110 0.077  0.132 0.118 0.098 0.079 0.091 0.084 0.066	0.098 0.093 0.093 0.080 0.056 0.058 0.048  0.086 0.077 0.066 0.051 0.057 0.049 0.041	<0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004  <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004	<0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004  <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004 <0.004
とうがらし (果実) 2002年	1	SC	250×3	3	1 3 5 7	1.51 1.29 1.02 0.92	1.45 1.14 0.99 0.87	<0.03 <0.03 <0.03 <0.03	<0.03 <0.03 <0.03 <0.03
未成熟いんげん (さや) 2002年	8	WG	125×3	3	0 1 3 5-6	0.48 0.23 0.35 0.18	0.24 0.15* 0.15 0.08	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02
未成熟いんげん (さや) 2002年	4	WG	200×2	2	0 7 13-14 21	0.59 0.08 0.06 0.06	0.34 0.07 0.04 0.04*	0.03 <0.02 <0.02 <0.02	0.02 <0.02 <0.02 <0.02
ぶどう (果実) 1995年	1	EC	62.5~188 ×7	7	0 3 7 14 21 28 42	1.14 0.65 0.47 0.24 0.12 0.10 0.08	1.14 0.65 0.47 0.24 0.12 0.10 0.08	0.09 0.15 0.18 0.14 0.11 0.10 0.09	0.09 0.15 0.18 0.14 0.11 0.10 0.09
ぶどう (果実) 1995年	1	EC	125~375 ×7	7	0 3 7 14 21 28 42	2.33 1.87 1.58 1.25 0.66 0.64 0.36	2.33 1.87 1.58 1.25 0.66 0.64 0.36	0.23 0.26 0.27 0.27 0.21 0.20 0.14	0.23 0.26 0.27 0.27 0.21 0.20 0.14
ぶどう (果実)	6 4 2	WG	153~223 ×8	8	0 14 21	3.40 1.20 1.78	1.44 0.80 1.15	0.19 0.04 0.12	0.09 0.04 0.12

作物名 (分析部位) 実施年	試験圃 場数	剤型	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI	残留値 (mg/kg)			
						トリフロキシ ストロピン		代謝物 B	
						最高値	平均値	最高値	平均値
1995~1996年	4				28	1.18	0.71	0.05	0.04
	6				35	1.23	0.71	0.11	0.05
	6				41-42	1.02	0.63	0.12	0.06
	2				48	1.42	0.86	0.15	0.13
ぶどう (果実) 1996年	2	WG	188×8	8	0	3.55	2.34	0.15	0.12
	2				7	2.28	1.30	0.09	0.08
	2				14	1.7	0.98	0.08	0.06
	2				28-31	1.66	0.94	0.08	0.06
4				35	1.47	0.85*	0.08	0.06*	
ぶどう (果実) 1995年	1	WG	188×7	7	0	2.48	2.48	0.14	0.14
					7	1.42	1.42	0.10	0.10
					14	0.97	0.97	0.07	0.07
					28	0.81	0.81	0.06	0.06
41	0.68	0.68	0.05	0.05					
ぶどう (果実) 1996年	1	WG	62.5~188 ×7	7	0	0.50	0.50	0.05	0.05
					3	0.35	0.35	0.05	0.05
					7	0.19	0.19	0.03	0.03
					14	0.11	0.11	0.04	0.04
					21	0.05	0.05	0.03	0.03
					28	0.04	0.04	0.03	0.03
42	0.06	0.06	0.03	0.03					
ぶどう (果実) 1996年	2	WG	188~190 ×6	6	35	2.24	1.74	0.07	0.05
ぶどう (果実) 1996年	2	WG	188×6	6	40~41	1.68	1.34	0.11	0.08
ぶどう (果実) 1995年	2	WG	188×8	8	0	1.71	1.64	0.11	0.10
					28	0.64	0.44	0.09	0.08
					35	0.58	0.41	0.09	0.07
					42	0.52	0.17	0.07	0.06
49	0.18	0.16	0.08	0.06					
かき (果実) 2002年	1	SC	-2)	3	22	0.11	0.07	<0.02	<0.02
				4	22	0.22	0.20	<0.02	<0.02
				4	14	0.64	0.46	<0.02	<0.02
バナナ (果実、無袋) 2001-2002年	3	EC	90	4	0	0.29 <sup>1)</sup>	0.20 <sup>*1)</sup>		
					1	0.23 <sup>1)</sup>	0.17 <sup>*1)</sup>		
					3	0.15 <sup>1)</sup>	0.13 <sup>*1)</sup>		
	2	EC			0	0.055	0.050	0.023	0.022*
					1	0.360	0.187	0.015	0.018*
					3	0.062	0.039	0.011	0.014
	2	SC			0	0.106	0.062	0.024	0.022*
					1	0.101	0.060	0.024	0.022*
					3	0.126	0.078	0.023	0.022*
	2	WG			0	0.066	0.038	<0.02	<0.02
					1	0.031	0.02*	0.017	0.018*
					3	0.071	0.044	0.017	0.018*
バナナ (果実、有袋) 2001-2002年	3	EC	90×4	4	0	<0.05 <sup>1)</sup>	<0.05 <sup>1)</sup>		
					1	<0.05 <sup>1)</sup>	<0.05 <sup>1)</sup>		
					3	<0.05 <sup>1)</sup>	<0.05 <sup>1)</sup>		
	2				0	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
					1	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
					3	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02

作物名 (分析部位) 実施年	試験 圃場 数	剤型	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI	残留値 (mg/kg)			
						トリフロキシ ストロビン		代謝物 B	
						最高値	平均値	最高値	平均値
	2	SC			0	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
					1	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
					3	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
	2	WG			0	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
					1	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
					3	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02
キウイ (果実) 2003年	6	WG	250	1	37-39	0.15	0.11	<0.02	<0.02
					55-58	0.09	0.04	<0.02	<0.02
					64-66	0.10	0.05*	<0.02	<0.02
					70-73	0.06	0.05	<0.02	<0.02
					78-80	0.05	0.03*	<0.02	<0.02
128-163	0.06	0.03*	<0.02	<0.02					
パシヤ (果実) 2003年	4	WG	139~151 ×4	4	0	0.28	0.18	0.04	0.03*
グアバ (果実) 2004年	3	SC	75×5	5	0	<0.05	<0.05		
					5	<0.05	<0.05		
					10	<0.05	<0.05		
					20	<0.05	<0.05		
					30	<0.05	<0.05		
150×5	0	<0.05	<0.05						
	5	<0.05	<0.05						
	10	<0.05	<0.05						
	20	<0.05	<0.05						
	30	<0.05	<0.05						
パッションフルーツ (果実) 2004年	3	SC	60×4	4	0	<0.05	<0.05		
					3	<0.05	<0.05		
					5	<0.05	<0.05		
					7	<0.05	<0.05		
					10	<0.05	<0.05		
	120×4	0	<0.05	<0.05					
		3	<0.05	<0.05					
		5	<0.05	<0.05					
		7	<0.05	<0.05					
		10	<0.05	<0.05					
綿実 (種子) 2002年	3	EC	100×3	3	21	<0.05	<0.05		
			200×3	3	21	<0.05	<0.05		
綿実 (種子) 2004年	3	SC	75×5	5	21	<0.05	<0.05		
			150×5	5	21	<0.05	<0.05		
コーヒー豆 (豆) 2002年	4	EC	113×3	3	30	<0.05	<0.05		
			225×3	3	30	<0.05	<0.05		

SC：フロアブル剤、EC：乳剤、WG：顆粒水和剤

1) トリフロキシストロビン及び代謝物 B の合計

2) 散布量：フロアブル剤（25%）を 2,000 倍に希釈し、植物体全体に充分量散布した。

- ・海外と日本の食品区分の違いにより、インポートトレランスが申請された食品区分と作物残留試験における作物名は必ずしも一致しない。
- ・CODEX 基準に該当する作物は残留試験が提出されていない。

<参照>

- 1 食品、添加物等の規格基準（昭和 34 年厚生省告示第 370 号）の一部を改正する件  
（平成 17 年 11 月 29 日付、平成 17 年厚生労働省告示第 499 号）
- 2 農薬抄録トリフロキシストロビン（殺菌剤）（平成 19 年 4 月 18 日改訂）：バイエル  
クロップサイエンス株式会社、一部公表予定
- 3 JMPR : Pesticide residues in food－2004（2004）
- 4 US EPA : HED Risk Assessment:Human Health Risk Assessment for  
Trifloxystrobin for New Section 3 Use on Soybeans (2006)
- 5 US EPA : Federal Register/Vol. 68, No. 43 (2003)
- 6 US EPA : Pesticide Fact Sheet : Trifloxystrobin (1999)
- 7 Australia NRA : EVALUATION REPORT Trifloxystrobin (2000)
- 8 Australia NRA : Trifloxystrobin Evaluation Report (1998)
- 9 食品健康影響評価について：  
(URL: [http://www.fsc.go.jp/hyouka/hy/hy-uke-trifloxystrobin\\_190605.pdf](http://www.fsc.go.jp/hyouka/hy/hy-uke-trifloxystrobin_190605.pdf))
- 10 第 193 回食品安全委員会：  
(URL: <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai193/index.html>)
- 11 第 9 回食品安全委員会農薬専門調査会確認評価第二部会：  
(URL: [http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kakunin2\\_dai9/index.html](http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kakunin2_dai9/index.html))
- 12 残留性に係る試験成績 トリフロキシストロビン：バイエルクロップサイエンス  
（株）、2008 年、未公表
- 13 第 39 回食品安全委員会農薬専門調査会幹事会  
(URL: [http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kanjikai\\_dai39/index.html](http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kanjikai_dai39/index.html))